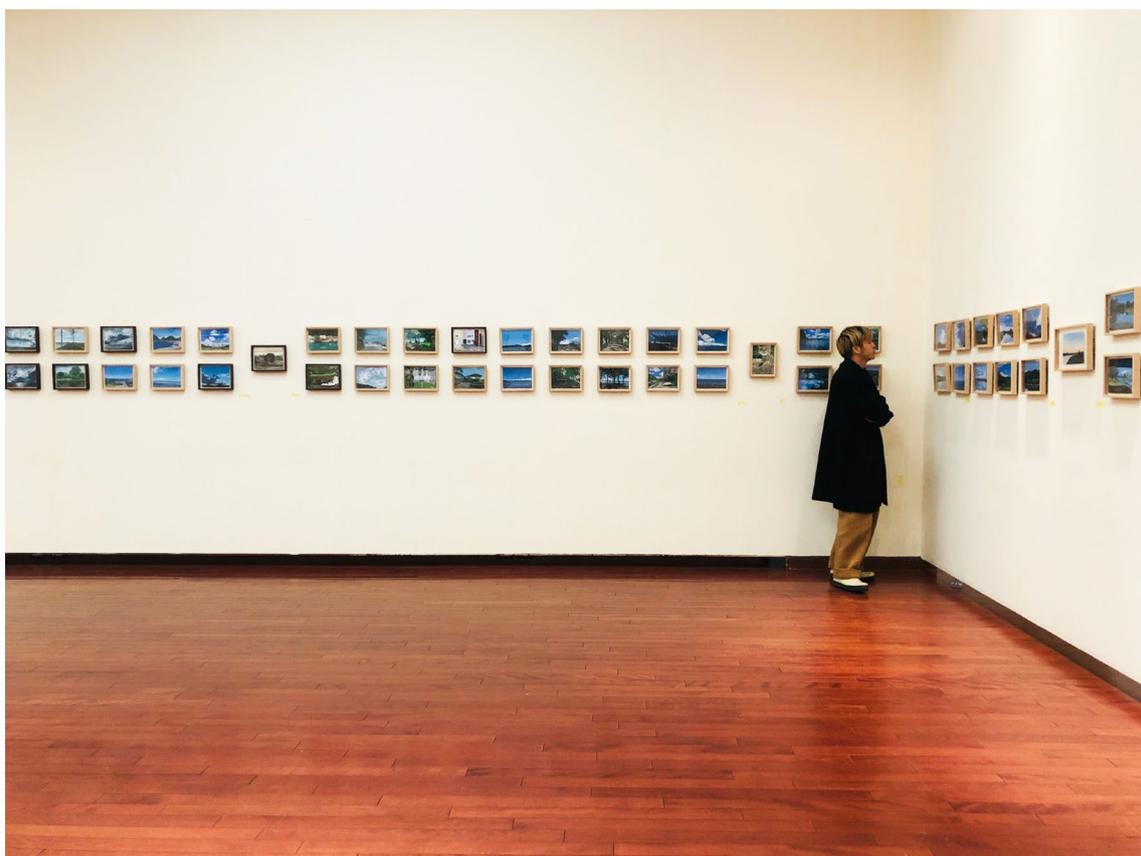


「坂口恭平日記」

「湿地帯」

坂口恭平



坂口恭平日記

会期 2023年2月11日(土・祝) - 4月16日(日)

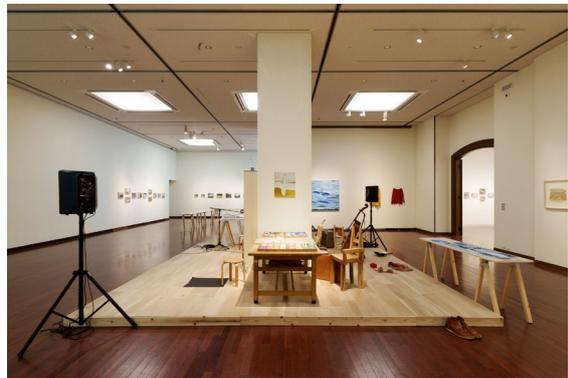
会場 熊本市現代美術館ギャラリーI・II

大きな催しの前には必ず、得意の躁鬱の波は揺れに揺れ、僕はオープン直前にかなり深い鬱に陥っていた。僕自身はオープニングにはもう参加できないかもしれないと諦めそうになっていた。しかし、今の僕は、躁鬱になっても、そんなに問題はないというか、もちろん体はキツく混乱はすごいのだが、もしも鬱になった時にどう備えておけばいいかがかなりわかってきたので、はっきりいえば、鬱になっても個展開催に関しては何も問題がなかった。無事に設営はほぼ終わったと連絡があり、僕が恐る恐る展覧会場に入っていくと、これまで自分が描いてきた700枚の絵たちと初めて一斉に再会した。その瞬間に僕の心は落ち着いて、鬱はスーッとどこかに流れていったのだ。流れていったと本当に僕は体で感じたような気がした。

僕が感じたのは、湿地帯のようなイメージだった。700枚の絵画と考えると、そんな枚数の絵が展示されること自体が珍しいと思うが、少しも窮屈さを感じないし、圧倒されるというわけでもなかった。どちらかという、それは絵ではあるが、絵というよりも「自然」に近いような感じがした。一枚の絵はどんな絵でも、何らかの意味があるし、主張があるし、画家の心が映り込んでいるものである。だから向き合う人間は絵の前で止まる。そして、何かを読み取ろう、感じ取ろうとするはずだ。しかし、僕の絵の前では誰もそんなふうな感じじゃない。僕自身もただ通り過ぎる。それこそ、いつもの見慣れた見慣れすぎて当たり前だと思ってしまった風景たちを通り過ぎるように。絵をそんなふうに通ら過ぎていいものだと感じさせたのがとても良い、と僕は感じた。自分自身がうっかり通り過ぎてしまって、それを悪いものだと思わなかったのだ。歌いに来てくれた音楽家の折坂悠太くんは「こんなに心に引っ掛からなかった絵たちがこんなに大量に展示されているという経験を生まれて初めてした」と言った。もしかして、他の画家にとっては、最もひどい否定の言葉かもしれない。でも、僕はそれを最上の褒め言葉に感じた。

ただそこかしこに水がチロチロと湧いている。そういう湿地帯が出来上がっていて、人は順路など気にせずに、何かふと感じる水辺にただ歩いて行き、そこで絵を見るみたいな主体的な動きを忘れ、ただその周辺の雰囲気の中に佇む、何かを見ているのでもなく、感じるだけになっていて、記憶とかを思い出しているのかもしれない。僕は絵を描いた画家ではなく、ただ毎日生活を送ってきただけで、それらを一堂に並べた時、僕は画家ではなく、やっぱり僕はなんらかの建築家、建物を作るわけではなく、人間が過ごす空間、つまり、それらの時空間全てを建築というのだと僕は認識しているが、そういう建築が作れたんじゃないかと思った。

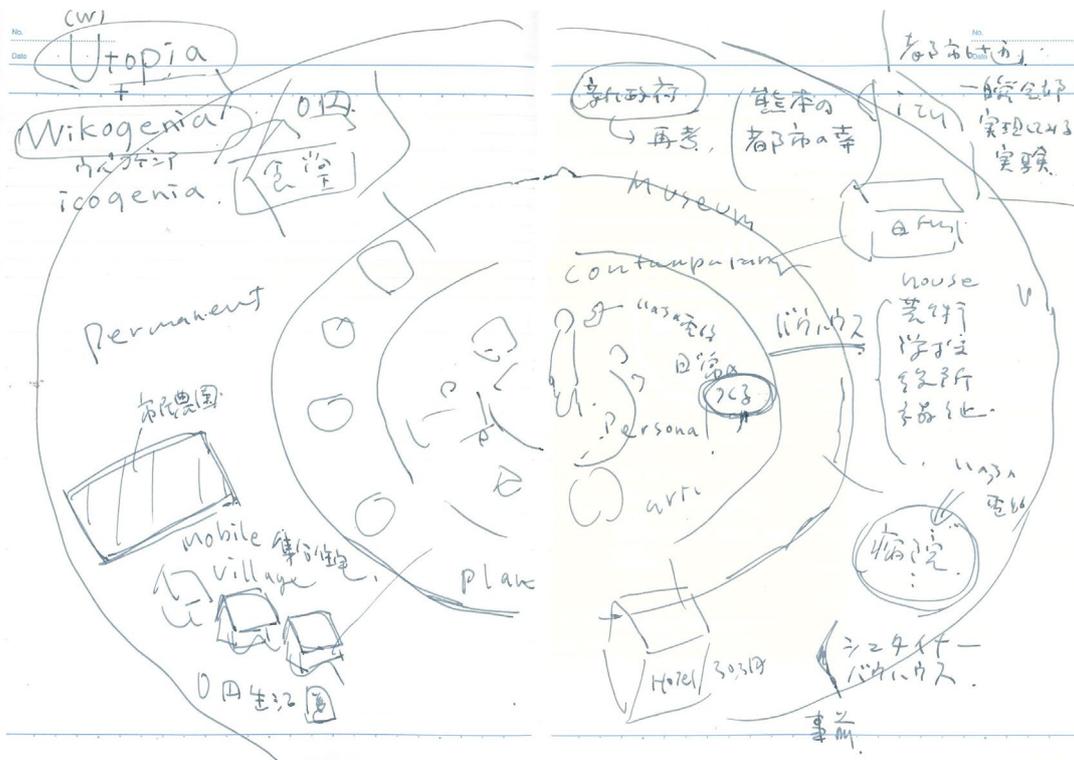
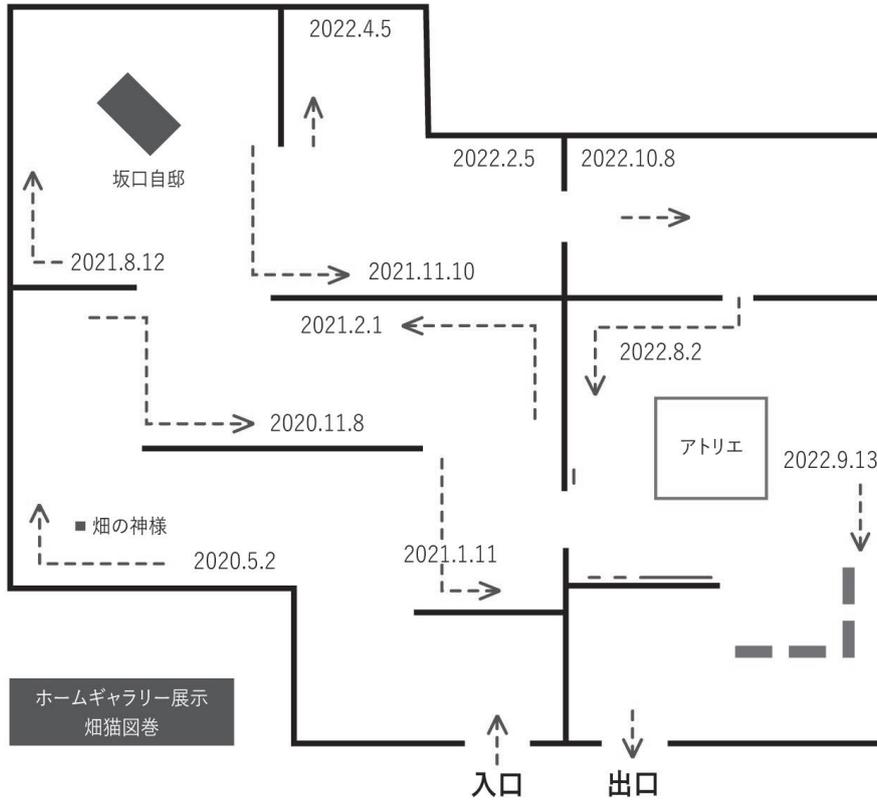
展示風景



会場風景



会場図面およびイメージスケッチ



坂口恭平によるイメージスケッチ (2019)